

羨望と感謝 (1957 年)

‘ Envy and Gratitude ’

<概要>

1、前提

クラインは、最初の対象関係（最初の対象＝乳房との関係および母親との関係）をその後の基礎となる重要なものとして研究してきた。

- ・最初の対象が摂取され、ある程度の安全感をもって自我のうちに根を下ろす場合には、その後の望ましい発達の基礎が得られる。そこには生得的な要因がある。
- ・乳房との最初関係には、難産、子供が適切な育児を受けているか、母親の育児に対する姿勢などの外的な状況が重要な役割を果たしている。
- ・幼児の母親との最初関係で基礎的な要因となっているのは、生の本能と死の本能の間の闘争である。「自己と対象が破壊衝動によって破滅してしまうのではないか」という恐れからやがて「良い乳房と悪い乳房が存在しているのだ」という感情をもたらす。早期の情緒生活は、良い対象の喪失と回復の感覚によって特徴づけられる。

2、早期の自我について（P-S position から D-position へ）

P-S position

- ・乳幼児は外界に投影した対象を取り入れる。
- ・部分対象関係

分裂

- 良い乳房と悪い乳房
- 悪い乳房が自分を攻撃してくる（迫害感）
- 悪い乳房を攻撃して引き裂いて食りたい（口唇サディズム）

?

?

?

統合

D-position

- ・部分対象から全体対象へ

- 自分が破壊しようとした悪い乳房が良い乳房と同じものであった（悲哀感情）
- 良い対象との同一化（自分の中に良いものがあるという自己感情をもたらす）
- 愛する能力や建設的な衝動や感謝などが強められる

エディプス期（生後3～6か月にわたってD-positionとともに生じてくる）

- ・ 幼児はしだいに愛情と憎悪の感情を統合し、罪悪感と結びついた悲哀（mourning）の状態を通り過ぎていく。幼児は外界をよりよく理解し始め、母親を自身の独占的な所有物としておくことが不可能なことであるという実感を持つようになる。

3、羨望

羨望

初期の幼児にとって、すべてのものである母親との関係に影響を及ぼすことによって、愛や感謝の感情をその根底から揺るがすもっとも有力な要因となるものである。生後すぐから働き出している破壊衝動の口唇サディズムおよび肛門サディズム的なあらわれであり、生得的な基盤に基づいている。

羨望（envy）：自分以外の人が何か望ましいものを持っていてそれを楽しんでいることへの怒りの感情。ただ一人の人物に対する関係。投影

嫉妬（jealousy）：当然自分のものだと思っていた愛情が競争者に奪い取られるか、その危険がある時に起こる。2人の人物との関係を含んでいる。

貪欲さ（greed）：激しいあくことを知らぬ渴望。乳房を完全にくみつくし、飲みつくし、むさぼりつくすことを主たる目的としている。破壊的な搾取

羨望を向けられる最初の対象は哺乳してくれる乳房である。

幼児の願望は、決して飲み尽きることがなく、常に存在している乳房にある。

羨望によって傷つけてしまったという感情やそのために生じてくる非常な不安、対象の良さへの確信の乏しさなどが貪欲さと破壊衝動を増大させる。

羨望に対する防衛...万能感、否定、分裂、理想化など

4、感謝

感謝

愛情の能力に由来する重要なものであり、良い対象との関係を作り上げるためにはなくてはならないもの。乳房での十分な満足を得ることは、幼児にとって、愛する対象から自分が大切にしたいと思っている贈り物をもらったのだと感じられることであり、これが感謝の基礎になる。感謝は、良い人物への信頼と密接に結びついており、愛する最初の対象を受け入れ、同化する能力が含まれている。

良い対象は自己を愛し、守ってくれるもの。自己によって愛され、守られるもの。これが自分自身の良さへの信頼の基礎となる。

5、結論

羨望：良い外的・内的対象との確かな関係の構築を妨げ、感謝の気持ちを土台から壊し、良いものと悪いものとの区別を曖昧にしてしまう。損ない、破壊するものである。良い対象が十分に確立されているならば、この対象との同一化によって、愛する能力や建設的な衝動や感謝などが強められる。

精神分析の究極的な目標は“クライアントの人格の統合”にある。

- ・羨望や破壊衝動とかたく結びついている不安や防衛を何度も繰り返して分析することにより、統合の進展が成し遂げられる。
- ・“徹底操作”の重要性：対象への羨望について分析を進めるとき、敵対的な感情は感情転移の中で分析していくことが必要であり、そうすることでクライアントはこれら初期の感情を再体験することができる。
- ・与えられる解釈が有効で正しいものであるという体験の繰り返しが、分析者（最初の対象）を良い人物として築き上げる。理想化に基づかずに良い対象としての分析家の摂取がなされると、良い内的対象がもたらされる。D-positionの通過が可能になる。

<感想と疑問点>

P-S positionからD-positionへと移行していく中で、乳幼児の対象関係に「羨望」「感謝」がどのような影響を及ぼしているかについて、クラインは詳細に述べている。

当初は一体感、万能感の中にいた乳幼児は、母親の乳房を良いものと悪いものとの分裂させるが、やがてそれらは統合され、全体対象として乳幼児の心に根づいていく。この一連のプロセスを妨げるものとして過度の羨望が取り上げられている。羨望は良い対象関係の構築を妨げ、感謝の気持ちを損ない、健康な性格形成や自我発達に悪影響を及ぼす。

このようなクラインの理論は、文面ではなんとなく理解できても、実感としてはしっくりこない。これは、クライン派の面接経過、その解釈を聞いたときに感じる違和感（のようなもの）に通じるものなのかもしれない。

乳幼児が母子一体の状態から離れて「個」として成長していく情緒的なプロセスを述べているのであるが、「乳幼児の情緒世界はそれほど破壊的なものなのだろうか？」というのが素朴な感想である。クラインは、最早期の羨望、破壊衝動について述べているが、乳幼児観察の中で、それらはどのような形であらわれてくるのだろうか？何を手がかりにして、クラインはこのような理論体系を作ったのだろうか？